



田中<sup>さん</sup>...目標高ければチーム力高まる  
 中村<sup>さん</sup>...決勝前夜は眠れなかった  
 源<sup>さん</sup>...プレッシャー逆に膨らませた  
 磯田<sup>さん</sup>...出せる力すべて出せて満足  
 谷口<sup>くん</sup>...自己ベストで念願の決勝に  
 禹<sup>くん</sup>...世界の強豪と泳げて幸せ

# 胸張ってシドニー報告

シドニー銀メダル1個、銅メダル3個の「中大パワー」を世界に見せつけた、田中雅美、中村真衣、源純夏、磯田順子、谷口晋矢、ウ・チヨルの6選手と高橋雄介コーチが10月2日、鈴木学長ら大学側に帰国報告をした。1週間前にシドニーから戻ったばかりという選手たちは、前夜も遅くまでテレビ出演するなど、オリンピックのその後の取材攻勢が続き、疲れを隠しきれない様子だった。しかし、報告会終了後もわれわれ学生記者たちの取材にも快く応じてくれ、「それぞれのオリンピック」を熱っぽく語ってくれた。

## 「旗振っているの見えた？」

この日、会場への一番乗りはスーツ姿に身を固めた田中、中村選手だった。「いま、久しぶりに学食で食べてたら、大勢の学生に声を掛けられて大変だった」と話す彼女たち。「じゃあ、すっかり安いもの食べられないね」と突っ込まれると、「いやっ、すっごい安いの食べちゃいました」と周囲を笑わせた。

世界のトップスイマーも私たちと何も変わらない中大生なんだな、と感じた。しばらくして、磯田、源谷口、ウ選手も相次ぎ到着。1号館の役員会議室で報告会が始まった。一行は鈴木学長、阿部理事長、松本水泳部長、各学部長ら大学関係者の大きな拍手に迎えられて部屋に入った。「よく頑張ってくれました。本当にお疲れさま」と、学長が労いの言葉をかける。「プールで中大の旗を振っているの見えた？」と松本水泳部長が聞くと、選手たちは大き



田中雅美選手

くうなずき「国旗よりも多かったです  
ね」と笑って答えた。鈴木学長と  
松本水泳部長は、シドニーに乗り込  
んで「中大水泳」を応援してきたの  
で、いきなりシドニー談義となった。  
チーム・キャプテンの田中選手は  
「学校に帰ってきて、全然知らない  
人にまで『応援していました』って  
いわれ、本当に多くの人に支えられ  
ているんだなと思いました。感謝し  
ています」。

「明治神宮に行つ  
たおかげかな？」  
女子400メドレーリレーの報告  
になり、源選手の「最後の意地の追  
い抜き」に話が及んだ。ラスト5メー  
トルの再逆転。4位にわずか0・17  
秒差のすべり込み銅メダル。「あれ  
はもう自分の力じゃなかった」と話  
す源選手に、「明治神宮に行つたお  
かげかな？」と高橋コーチ。会場は、  
この一言で緊張が和らいだ。  
日本の女子でフリー決勝進出は源  
選手が初めて。歴史に残る快挙にも、  
彼女は淡々とした口調で「歴史的な  
ことをいわれてもよく分からない。  
私としては残るべくして残つただけ  
後で皆にいわれて、改めてすごいこ



中村真衣選手

となんだな、と実感しました」と報  
告した。  
初めてオリンピック出場を果たし  
た谷口選手は、自己ベストで念願の  
決勝に残ることができ、「8位入賞」  
は満足のいくものだった。「世界の  
トップと、それほど違わないと思ひ  
ます。しかし、大きな大会での経験  
不足を痛感しました。今後の目標と  
しては世界のトップレベルに少しで  
も近づけるよう、海外遠征をたくさ  
ん経験していきたいと思ひます」と  
話した。  
同じく初出場の磯田選手は、10  
0<sup>メートル</sup>は腰を痛め「飛び込むだけでも  
痛みが走る」状態で、やむなく棄権  
本職の200<sup>メートル</sup>一本に絞つた。結果  
は準決勝敗退となったが「出せる力  
は全部出し切つたので満足していま



源 純夏選手

す。でも、決勝のレースを見ていて、  
やはり自分も泳ぎたかつた」と残念  
がつていた。  
韓国代表として出場したウ・チョ  
ル選手も200、400<sup>メートル</sup>とも準決  
勝で敗退したが、400では自己ベ  
ストを更新した。「いろいろな選手  
と闘うことが出来て、いい経験だつ  
た」と控えめなコメント。中大卒業  
後は韓国に戻つて2年間の兵役義務  
が待っている。  
「メダル取ろうね」  
と約束した仲間  
引き続き行われた学生記者たち  
とのインタビューでも、400<sup>メートル</sup>メ  
ドレーリレーの3選手（このほか、  
バタフライの大西選手＝ミキハウ  
ス）に質問が集中した。中村、源選  
手によると、彼女たちは高校生の頃  
から「リレーでメダルを取ろうね」  
と約束した仲だった。「メダル獲得  
はうれしいというより、目標を達  
成したという気持ちだった」という  
中村選手に対し、源選手は「一緒の  
チームで泳ぐために3人がいたのか  
なと思えるほど、いろいろな面で



磯田順子選手

合っていたし、とにかく3人の名前が連なっていて好成績が残せてよかった」と話したことが印象的だった。ここでキャプテンの田中選手が、この話をまとめてくれた。「3人で日本チーム代表として、オリンピックに行けるとは思ってもいなかったし、1年後に入ってきた2人からパワーをもらったという感じです。リレーは4人の力で、初めて実った結果で、大変な重みを感じました」と振り返った。さらに、田中選手は今回、中大から6人もの選手が国の代表として選ばれたことに對し、中大の強さを次のように話した。

「個人の目標も高いし、それによってチームとしての目標も高まっているという、全体で一つのビジョンに向かっていける恵まれた環境にあつたと思います。皆、努力を惜しまず練習するし、自主練も率先してやる。そういう小さなことが結果として、大きなことに向かっていたんです」

変なことだと思った。



谷口晋矢選手

オリンピックには、やはり独特な雰囲気がある。大会中にその場でレベルが上がっている。そんな中で決勝に残り、結果を出すのは本当に大変なことだと思った。

オリンピックという大舞台におけるプレッシャーとの闘い。「以前から周囲の期待が予想以上に大きく、私自身でプレッシャーをかけてしまっていました」と田中選手はいった。その彼女に「プレッシャーを感じないよう自分に持っていきこうとしても、頭で考える以前の問題でした。結局、オリンピックをどう捉えるかは自分次第だと思います」といわしめるほどだった。

個人でメダルを期待されていただけに、苦しい大会となってしまったといえるが、自身はやるべきことはやっただし、自分が頑張ってきたことは、他でもない自分が一番よく分

「中大の誇り」……心から拍手として輝いて見えた。彼らは中央大学の誇りであると同時に、私たち中大生の誇りでもある。心から彼らに拍手を送りたい。本当に「苦労さまでした。」



禹 澈選手

かっている。中村選手にも今までに感じたことのないプレッシャーがあった。銀メダルを取った100m背泳ぎ決勝の時も、前夜は全然眠れなかったし、昼寝もできなかった。そんな中で、こんな結果を残せたことに非常に満足している。

一方、源選手は前回のオリンピックを経験したことから、イメージトレーニングの中で「できるだけプレッシャーを大きく膨らませるようになった。すると、気楽に泳ぐことができたし、選考会から始まって、数百人しか出られない舞台に出られて幸せだなあ」と思ったそうだ。

### 心から拍手

帰国した6人は、またプールと家を往復する毎日が始まった。「今はただ、自分のベッドに寝られることが一番うれしい」という源選手の気持ちは、本当に分かるような気がした。自分に満足した選手、苦い思いをした選手、思いはさまざまだろう。厳しい練習、鍛え上げられた精神力と惜しめない努力……。そのすべてを兼ね備えた6選手は全員、堂々

#### 学生記者

玉井 安子 文  
木瀬 恵子 文  
大谷 秀之 写真